

# 朝鮮近代のナショナリズムと東アジア

——初期開化派の「万国公法」観を中心に——

趙景達

## 一、はじめに

朝鮮近代の課題がいかなるものであったかという設問は、すぐれて今日の問題関心に直結するものである。たとえば、姜万吉氏は統一問題との関わりで次のように述べている。

近代以後における我が民族の歴史的課題としての統一された民族国家の樹立過程は、門戸開放以後の時期から植民地の時期を経て将来の民族統一がなしとげられる時期にまで及んでおり、民族統一が達成された後には、開化期と植民地時代そして分断時代が、あわせて統一民族国家樹立過程としての一つの時代として把握され、統一以後の時代と区分されて「近代史」に含まれることになるであらう。

ここでは朝鮮近代の課題が民族（国民）国家の創設であるとされているがために、分断という現実によってそれをいまだ達成していない朝鮮史は、いまなお苦難の近代史の途上にあるものとされるのである。

しかしこうした国民国家至上論——「未完の近代史」——理解は、現在

の時代認識として問題がありはしないか。筆者には分断という現実の克服は、南北に奇型的に創設された二つの国民国家の相対化を前提としてこそ可能なるように思われる。

そもそも朝鮮近代の課題が、近代西欧的な国民国家の創設という理念だけに収斂され得るものかどうか疑問である。姜万吉氏においては、朝鮮の近代化を推進して行こうとしたとされる開化派の中でも、「東道西器」論の立場に立つ改良（稳健）の開化派は国民国家を実現しようとする思想を持たなかったか、あるいはそれが脆弱であったがために、近代化勢力として認定され得ないと考えられているようである。だが、そうした理解——おおむね通説的理解となっている——はあまりに一面的にすぎない。改良の開化派の思想に国民国家創設の意図が全くなかったとは言えないし、またたとえその意図が不十分であったにせよ、そのことが改良の開化派の朝鮮近代史上の価値を低めることにはならないと思われる。改良の開化派の思想はむしろ、朝鮮近代史のまた別の一つの可能性を提示するものではなかったのか。

そこで本稿の課題は、改良的と変法（急進）的との両開化派の思

想について、①文明觀との関わりで、②その朝鮮独立化構想を検討することにある。その際①は、当時東アジア世界に新しい国際秩序觀を強要することとなった「万国公法」——国際法に対する認識との関連のもとに考察することとする。また②は、対清關係をどう認識していったかに焦点を合わせて論ずることとなる。なぜなら、西勢東漸の危機的状況に対処するに、朝鮮が伝統的な東アジア秩序——朝貢体制に組み込まれていた以上、開化派はまずもってそれとの関わりをどうするかという問題に直面せざるを得なかったからである。

最近中国史では、溝口雄三氏によって「中体西用」論の立場に立つ洋務派の再評価が試みられた。また、濱下武志氏によって東アジアの近代を朝貢体制の変容との関わりにおいてとらえる視点の必要性が訴えられた。両氏の問題提起は朝鮮近代史を考える上でも多くの示唆を投げかけている。本稿は両氏の問題提起に多分に勇気づけられたものであることを付言しておく。

## 二、改良の開化派の対清協調論

「万国公法」がいつ朝鮮に将来されたかは定かでないが、たとえ一八七六年二月の開国（朝日修好条規締結）以前に将来されたとしても、それへの関心がにわかに高まるのは開国以後、すなわち条約体制への参入が不可避になって以後のことである。日本をも含む欧米列強の侵略脅威にさらされたながらも、国民国家を前提として生まれた近代西欧世界の論理——「万国公法」の中に弱小国が生き残り得る論理を見出したことがその最たる理由であった。

開国後逸早く「万国公法」への関心を表明した者はおそらく、朝

日修好条規の締結から三ヶ月後に日本に派遣された第一次修信使の金綺秀であろう。彼はその見聞記で、

其所謂万国公法者、諸国締盟、如六国連衡之法、而一国有難、万国救之、一国有失、万国攻之、無偏愛憎、無偏攻擊、此西人

之法、而方規規奉行、不敢有失。

と述べている。彼は中国戦国時代に行なわれた連衡政策に付会させて「万国公法」を理解しているのだが、それはとりもなおさず「万国公法」の背骨を貫く「均勢」論理への共感に他ならなかった。この論理こそは、西勢東漸の対外的危機の中で朝鮮が独立を維持し得る一つの有力な理念的根拠となるものであった。

開化派のうちでも改良の開化派の場合、こうした論理を持つ「万国公法」への注目の仕方とはとりわけ顕著であった。そのことは一八八〇年に第二次修信使として訪日した金弘集が、駐日清国公使何如璋との会談で次のような会話を交わしているのを見れば明らかである。

璋（何如璋—筆者注）曰、近日西洋各国、有均勢之法、若一国与強国隣、惧有後患、則聯各国以圖章制、此亦自前不得已應接之一法。

宏（金弘集—筆者注）曰、均勢二字、近始從公法中見之、然本國、稟守旧規、視外国如洪水猛獸、自來斥異教甚峻故也、大教如此、第當鼎告朝廷。（傍点は筆者による。以下同じ）

すなわち金弘集は、「均勢」論理で貫かれた「万国公法」が一国の独立を保障する根拠ともなるべきものだと思えるが故に、朝鮮国内の西学を拒否する衛正斥邪の風潮を嘆いている。この時期は欧米への

開国はいまだなされていなかったのだが、早晚迎えなければならぬその事態に備えて、彼は「万国公法」の受容は必須だと考えたのであった。

朝鮮の真の開国は一八八二年五月の朝米修好通商条約の締結を待たなければならぬ。一八七六年二月の対日開国は、朝鮮側の主観においては以前まであった（江戸時代の）交隣関係の修復を図ったにすぎず、近代的な外交関係の樹立を意味するものではけつてなかった。しかし「洋夷」への開国は不可避であり、自己の安全保障上から朝鮮の戦略的重要性を認定する清国は、日本と欧米の相互牽制を図るため、朝鮮に欧米への開国を勧告した。ここに朝鮮は、清国の指導の下に第二の開国＝文字通りの条約体制への参入を決意するに至る。すなわち国王高宗は、一八八一年九月技術者養成のために領運使として清国天津に赴く改良の開化派の代表人士金允植に、より重大な使命としてアメリカとの修好通商条約締結のための交渉を行なうことを命じた。

もともと金允植は李鴻章との交渉に終始し、アメリカの代表者である海軍提督シュフェルトとの直接交渉は、李鴻章とその幕下の馬建忠などの洋務派官僚によって行なわれた。しかし李鴻章との交渉を命ぜられた金允植は、「万国公法」に対する認識とともに、朝貢体制と条約体制の二重体制が朝鮮にとって持つ意味をも明確にする必要があった。そのため、改良の開化派の中でも彼は「万国公法」について比較的多く言及している。そこで次に、彼の「万国公法」観と二重体制に対する認識について検討してみることになしたい。領運使行より十年の後、金允植は当時を回顧して次のように述べて

いる。

我国素無他交、惟北事清国、東通日本而已、自数十年前来、宇内情形日變、歐洲雄長東洋諸國、皆遵其公法、捨此則孤立寡助、無以自保。

西勢東漸に対するに、「万国公法」をもってしなければ「孤立寡助」の状況に陥ってしまうというのである。言わばそれは、「万国公法」という近代西欧世界の論理を認めてその世界に朝鮮も入って行くこと、すなわち条約体制に参入することによつてはじめて朝鮮の独立が維持できるという議論に他ならない。ヴェトナムやビルマ・琉球の衰亡は、世界と広く交わることをせすにもっぱら一国（清国）に依存した結果である。宗主国たる清国は救援するという意志はあっても、今や「鞭長不及之歎」があり、十分に援助の手をさしのべることができない。それゆえこうしたアジアの情勢を見る時、朝鮮の条約体制への自主的な参入は不可避であり、それは清国から再三にわたって勧告されたことでもある。金允植によれば、朝鮮が対欧米開国に踏み切らなければならない動機はこのようであった。

しかし条約体制移行の前提となる「万国公法」の遵守は、果たして真に朝鮮の自主独立を保全する方途たり得るのであるか。これに關して朝鮮が小国であることを自認する金允植の見解は明瞭である。彼はある洋務派官僚との会談の中で、

近來事、惟視強弱、不在公法、然小邦自守之道、惟在謹守公法、無失信於他邦可也。

と述べている。朝鮮のような小国は「万国公法」を顧みない弱肉強食の世界の風潮の中であえてそれを守り、諸外国に対して「信」を

貫き通すことによつてのみ自守が可能になるというのである。ここには「万国公法」―「信」を世界に問おうとする金允植の深い思想があり、そこそが彼の真骨頂であつた。

事実においてそうした金允植の考えは、一八八五年四月のイギリスによる巨文島占領事件への対応ぶりに表われていた。その時督辦交渉通商事務の任にあつた彼は、

此島係我我国地方、他国不応占有、於万国公法、原無此理、(中略) 豈知如貴邦之敦於友誼、明於公法、而有此意外之舉耶、殊違所望、不勝詫異、貴國若以友誼為重、翻然改圖亟去此島、

として、あくまでも「万国公法」の正義に依拠することによつてイギリスの非を鳴らして巨文島から退去させようとした。

金允植は現実世界において「万国公法」の理念が全面的に貫徹するという樂觀論の立場に立っているわけではけつしてない。むしろその有効性に疑問を呈している。日本の琉球処分に対して欧米列強がなんら干渉しなかつたことに言及して彼は、「万国公法亦不足称也」と言い切つてもいるのである。しかし彼は「若以強制強、反恐有欠折之患」と考へており、小国朝鮮の自立の道は「万国公法」に徹底的に依拠するしかないことを強調する。それは覇道をあえて行なう欧米列強に対する王道論的立場からの批判であつた。

そもそも金允植のこのような「万国公法」遵守論は、彼の儒學者としての矜持より結論される当然の信念であつた。孔子の教えに則つて「信者政令之本也」と考へる彼は、外交に關して、

夫信者国之宝也、苟能守信、雖無城郭・甲兵、可以自保、如其無信、雖有四海之富、金湯之固、不足恃也、約条者交際之大信

也。

と述べている。彼は「信」こそが國家獨立の基礎をなすものであると認識しているものであり、それゆゑ「約条者交際之大信」に他ならないのであつた。儒教の論理の中で「万国公法」が積極的に肯定されているわけである。彼は現在においても「聖人之道」を實踐して、朝鮮を「有道之國」にすることに、覇道―「無道」がまかり通る世界の現實に対処しようとする考へを持っていた。儒教型理想主義ともいふべきそうした思想的營爲の中で、彼は西欧近代の論理を見事に取り込むとともに、またそれへの批判の論理をも明確にしたのだと言ふことができるであらう。

したがつて金允植は他方で、伝統的な東アジア秩序(儒教文化圈)に強いこだわりを持つ。当然のことながら、以上のような条約体制参入論―「万国公法」遵守論は清國との朝貢体制の堅持を前提としているのである。彼は二重体制に対してなんらの疑問もさしはさまず、むしろ積極的に肯定する。李鴻章が朝米修好通商条約に「朝鮮久為中國屬邦、而外交内政事宜、均得自守、他國未便過問、方覺不触不背」という属邦條款を入れるべきことを提議すると、金允植は「条約中、此一款添入似為極好」と答へ賛意を表した。それは何よりも、朝鮮のような弱小國は「大邦之作保」がなければ「特立」し難いからであり、清國の朝鮮に対する後見が世界に明確になれば、朝鮮が軽んぜられることもないからである。しかもそれは朝鮮の自主權の喪失にはならず、清國への「事大之義」にもそむかない「兩得」である。金允植においては、衰えたりとはいへ清國への朝鮮の事大は「天下之所共知」のきわめて当然のことであつた。

こうした考えは当時であつては全くの正統論であつて、閔氏一族の一員であり閔氏政権の重要な地位を歴任した閔泳煥も、「我国乃中国之東藩、字小事大、固有名分」と述べ、小国朝鮮の中国への事大を正当化している。しかもその関係は、

中東相争、自古已然、論其境界、則只隔一水、論其人物、則亦是同種、論其情誼、則便似兄弟、論其依附、則無異唇齒。

とされ、単なる事大関係の範疇ではとらえ切れないほど濃密なものである。ただ彼は、それは必ずや朝鮮の「自強之政治」を前提としなければならぬと言う。なぜなら、自強をならぬと図らずにもっぱら中国に依存しては、中国から「屍人・蕩子」の如く見られ、かえって見捨てられてしまうからである。この対清協調論は、伝統的な事大主義外交に立脚しながら、しかもそれとは截然と区別される自強的事大政策というべきものであつた。

金允植の朝貢体制堅持論もこうした自強論を前提としていることは言うまでもない。彼の自強論は富国策を優先し強兵策を猶予するという点に特徴があつた。彼の国家独立構想は一口に言つて、自強的事大政策を前提とする小国主義と言ひ得るであらう。

こうした国家独立構想はおそらく、改良の開化派にあつては共通の認識となつてゐたと思われる。すなわち、いま一人の代表的な改良の開化派人士の魚允中にあつてもそれは同様であつた。彼もまた、朝鮮商民水陸貿易章程（一八八二年一〇月）をはじめとする三つの対清貿易章程の締結の任に当たつて、属邦条款の挿入を認めて対清宗属関係の強調による対外抑止力に重点を置いていた。そして彼の小国主義は、具体的にベルギーやスイスをモデルとした自強論を唱

えるところに特徴があつた。すなわち彼は、

諸大國所行、多藉其物力之富、修濫過度糜財不小、如我小國、未易跋及、而又欲倣之、則勞民傷財而已、現西洋英・法・德・俄之外、白耳義・瑞西等國、治法政規、多有可觀、此英・法・德・俄、反有勝者耶。

と述べ、朝鮮のような小国は西欧に学ぶ場合、大国よりも小国に注目すべきであるとしたのである。

ところで、以上のような改良の開化派の対清協調論は自強的事大政策を前提とする小国主義は、興味深いことに清国李鴻章の属国支配観と対応するものであつた。茂木敏夫氏によれば、李鴻章は近代西欧的な属国支配植民地支配の道を拒否し、伝統的な宗属関係の枠組を維持しつつその実質を変えて行く道を選択したと言うが、それはまさに改良の開化派の国家独立構想を裏打ちするものであつた。だからこそ金允植は、「当今識時務者、宜莫如北洋大臣李鴻章」として李鴻章を賞賛したのである。

またいま一つ興味深いこととして、李鴻章の「万国公法」観と金允植のそれとの近似性ということがある。朝日修好条規の締結に先立って、一八七六年一月二四日李鴻章と駐清日本公使森有礼との間に会談が行なわれたが、その中で「万国公法」をめぐる次のような会話が交わされた。

鴻章 我々東方諸國の中、清國が最も大きく、日本之に次まずが、其余の各小國も均しく、心を合せ、睦み合ひ局面を挽回するに於ては歐洲に対抗する事が出来ませう。

森 私思ひまするに、修好条約などは、何の役にも立ちませ

ん。

鴻章 両国間の和好は皆条約に拠るものですのに、何故役に立たぬと云われるのですか。

森 通商と云ふが如き事は条約に照して之を行ふ様な事もありませんが、国家の大事と云ふ事になりますと、只誰が、いづれが強いかと云ふ事によって決するもので、必しも条約等に依拠する必要はないのです。

鴻章 それは謬論だ。強きを恃んで約に背くと云ふ事は万国公法も之を許さざる所です。

森 万国公法又無用なりです。

鴻章 約に背き公法に背くは、世界各国の容れざる所です。

ここでは朝貢体制の維持を意図する李鴻章が「万国公法」の遵守を主張するのに対し、条約体制への一元化を意図する森有礼がそれを否定するという皮肉な構図が展開されている。単に朝貢体制の維持というだけでなくアジア連帯論までも唱える李鴻章にとって、「万国公法」はまさにアジア諸国の独立を保障する理念的根拠なのであり、この点で李鴻章の「万国公法」観は金允植のそれと全く同じであると言えよう。金允植においても李鴻章においても、「万国公法」の遵守を前提とした、中国を中心とする東アジアの協調体制の創出こそが目指されていたのである。それは西勢東漸に対するに、伝統的東アジア秩序の維持に基づく国家独立構想であり、日本的な脱亜コースを否定する一つの東アジア近代化の模索であった。

### 三、変法的開化派の対清協調論

朝貢体制の維持を図る改良の開化派に対し変法的開化派は、その体制の打破こそを朝鮮近代化の前提条件としていた。一八八四年の甲申政変の参加者であるとともに、一八九六―一八九八年の独立協会運動の指導者でもあった徐載弼は、後年変法的開化派甲申政変の領袖金玉均を回想して、

彼は祖国が清国の宗主権下にある屈辱感にたえることができず、いかにすればこの羞恥を脱して、朝鮮も世界各国中の平等と自由の一員になり得るか、いつも苦心焦思していた。彼は現代的教育を受けることはできなかったが、時代の趨勢を洞察して朝鮮も力ある現代的国家になろうと切実に望んだ。

と述べている。改良の開化派とは異なり金玉均においては、朝貢体制こそが朝鮮の自主独立を阻害する体制であると認識されていたのである。彼自身も、

撤退、弱絆、特立為独全自主之國、欲独立、則政治外交不可不自修自強。

と述べ対清独立路線を明確に主張していた。

では、金玉均が目指した「現代的国家」は国民国家のモデルはどこか。徐載弼は先の回想に続けて、「彼はいつもわれわれに、日本が東洋のイギリスになるならば、われわれはわが国をアジアのフランスにしなければならぬと言った」と述べている。金玉均は日本を当面のモデルとして朝鮮の富国強兵と大國化の道を模索していたと言うことができよう。金玉均ら変法的開化派と小國主義を標榜する改良の開化派とは、理想的国家像をめぐるその性格の違いは明瞭であった。

こうした両者の性格の違いはその文明観の相違に起因している。金允植は両者の文明観の相違を次のように指摘している。

聞歐洲之風、而漸革其俗曰開化、東土文明之地、更有何可開之化乎、甲申諸賊、盛尊歐洲、薄堯舜、貶孔孟、以彝倫之道、謂之野蠻、欲以其道易之、動稱開化、此可謂天理滅絕、冠履倒置矣、(中略)所謂開化者、即時務之謂也。

すなわち「東土」を「文明之地」と見るか否か、あるいは「堯舜」「孔孟」の教を「彝倫之道」と見るか否かにおいて両者間には大きな隔たりがあった。金允植においては「東土」がもとより「文明之地」である以上、開化はなんら必要とされず、もしそれあるべきとすれば、「時務」としての開化のみであった。ところが金玉均らにあっては、「東土」は西欧文明によって開化されなければならない「野蠻」の地なのであった。それは相容れることのない儒教観の相克であったとも言える。

改良の開化派と変法的開化派の思想の相違はおよそ以上のように概括される。それゆえ後者のみによって敢行された甲申政変は、①西欧近代文明崇拜に基づいて、②条約体制への一元的参入||対清独立を果たすべく、③朝鮮の富国強兵||大國化を意図するクーデターであったと評価するのが妥当であろう。このような変法的開化派の思想は、甲申政変以後も西欧文明崇拜に基づく富国強兵論という限りにおいて基本的に継承される。

たとえば朴泳孝は一八八八年に国王高宗への上疏をしたためたが、これは西政と古典の付会という手法を取りつつも福沢諭吉の影響を強く受けたもので、全編西欧文明信仰に彩られている。したがって

彼は依然として日本をモデルとした朝鮮の富国強兵化を意図し、「彼已就開明之道、修文藝、治武備、幾与富強之國、同軌」として日本を賞賛する。

そして特徴的なことはその「万国公法」観の改良の開化派との相違であり、朴泳孝は、

方今宇内万国、猶昔之戰國也、一以兵勢為雄、強者并其弱、大者吞其小、(中略)雖有万国公法均勢公義、然國無自立自存之力、則必致割裂、不得維持、公法公義、素不足以為恃也、以歐洲文明強大之國、亦見敗亡、況亞洲未開弱小之邦乎、大凡歐人口称法義、心懷虎狼。

と述べている。すなわち、徹底した弱肉強食認識に基づく否定的な「万国公法」観と西欧列強への不信感の表明である。これは彼の西欧文明崇拜の姿勢と矛盾するように見える。しかし彼は

印度雖亞洲中盛大之邦、亦因其内乱無備、為英所領、其人民蒙承英政府之命、不欲自立政府者、無他、英之法律寬、而政治正、人々各安其生。

とも述べており、その矛盾はたちまち氷解される。ここでは文明の名の下にイギリスのインド支配が合理化されて、ある種の帝國主義肯定論が展開されているのである。朴泳孝にあっては、弱肉強食の現実悲惨ではあるが、確実な文明の波及過程でもあって、必ずしも否定的には認識されていなかったと言える。

このような朴泳孝の認識はこの時期の金玉均においてもほぼ同様であった。金玉均も一八八六年に国王高宗への上疏を書き、それは『朝鮮新聞』七月八日付雑報覽に公表されたが、そこでは「愚昧ノ

人民ニ教フルニ文明ノ道ヲ以テ”することが唱えられた。また巨文島事件に言及して、富国強兵に徹すれば、やがてイギリスは巨文島を退去するだろうとしたが、それは「万国公法」に徹底的に依拠することによって、イギリスの巨文島退去を迫った金允植の外交姿勢とは異なるものであった。金玉均の「万国公法」観もまた否定的であったものと考えられる。

以上のように朴泳孝においても金玉均においても、以前からある西欧文明崇拜に基づく富国強兵論は甲申政変後に至っても基本的には変わり得なかった。しかし同じく富国強兵論といっても、この時期に至ると単純な大國志向は消失し、他の方策が視野に収められて来るようになる。

金玉均は先の上疏とは別に同じ頃李鴻章にも書簡を送ろうとし、それは上疏発表の五日後の七月一三日に同じく『朝野新聞』の雑報覧に掲載された。上疏といいこの書簡といい、その執筆の動機は池運永なる刺客を派遣して自らを暗殺しようとした朝鮮政府と、それを支援しようとした袁世凱の頭目李鴻章に対する抗議であった。しかしその政策議論上の内容は大きく異なっており、李鴻章宛書簡の結論は要するに次のことに尽きる。

然則閣下何不推尊大清国皇帝陛下、為天下之盟主、布公論於欧米各大国、与之連絡、立朝鮮為中立之国、作万全無危之地、閣下繼以老練手段、尽善隣友睦之誼、固結輔車之盟、以展東亞之政略、則此不独朝鮮之幸、恐亦為貴国之得策。

すなわち、清国が盟主となって欧米列強に説き朝鮮を中立化させるならば、それは朝鮮にとっても清国にとっても得策であるというの

である。上疏において、

清国ノ如キ近年他国ノ為メニ安南・琉球ヲ占領セラルムモ亦一言ノ抵抗ヲ試ムル能ハズ。然ルニ之ニ託スルニ我邦ヲ以テシテ高枕安臥スルコトヲ得ベシト云フハ実ニ笑フ可キノ至リナリ。と述べ、はっきりと対清不信論を展開しているのと比較すれば、その違いは明瞭である。このことはこの時期の金玉均が富国強兵化による朝鮮独立論を依然として主張しながらも、他方では対清協調による朝鮮中立化を模索していたということを示している。『東京日日新聞』の同年七月一七日付論説「金玉均」では、上疏と書簡の違いを指摘して前者に対し、

然らば則ち金が朝鮮国王に進むる所の大計（富国強兵論―筆者注）は大だ良しとするも之を實行せんには明主を輔佐するに賢相良弼を以てして十分の熟慮を費し非常の英断を行ふこと恰も我國の維新に於けるが如くならざれば到底其実を舉ること能はずして偶々國変を招くに過ぎざるの恐れあるべき歟。

と論評した上で、後者こそを「これ実に金玉均が主眼の論趣なるべし」と断定している。当時すでに、金玉均の上疏と書簡との違いは少なくとも日本の一部の有識者には矛盾したものと感じ、しかも彼の真意は後者、すなわち対清不信論ではなく対清協調論にこそあると思われていたのである。そして事実において彼は、所謂「三和主義」を唱え、『興亜の意見』と題する一篇を草し、日韓清三国が提携して欧米東漸の侵略を防遏すべき事を論じ、之を携へて支那に赴き李鴻章を説得しようと計画した<sup>10</sup>結果、上海に赴きその地で非業の最期をとげる。



以上を要するに、甲申政変失敗を契機に金玉均の対清独立路線を前提とする大國志向を内に秘めた富國強兵論は、中立論や東アジア三国連帯論を射程に入れた対清協調路線を前提とする富國強兵論——これはもはや文字通りの富國強兵論ではなく、自強論といった方が適切かもしれない——に変わって行ったと言うことができる。対清協調路線への転回とはいえ、それは必ずしも朝貢体制の維持を前提とするわけではけつてない。また文明（近代）主義に貫かれてゐる点で、その富國強兵論は金允植ら改良の開化派との差異を依然としてきわだたせてはゐる。しかし金玉均の考えは今や、改良の開化派の自強的事大政策を前提とする小國主義に真つ向から対立するものではなく、むしろそれに微妙に接近した朝鮮独立論の形式を整えるに至つたと言ふべきである。

このことは再び朴泳孝に立ち返つてみても恐らく同様である。彼は「敦謹、清、慎而和魯、倚托於美、親交日本、結英・德・法等國事」を主張したが、それは清國への特別の配慮を前提とした全方位外交論の主張に他ならない。また彼は「交外国以信、不可違背、且与約必慎、不可輕卒事」を主張してもゐる。既述したように「万国公法」への不信任感を表明しているにもかかわらず、ここにおいて「信」を外交の基本にすすめるに至つたことは注目される。その文明主義の故に彼の否定的「万国公法」観が、金允植のような欧米批判に帰結しなかつたのは確かな事実ではある。しかし外交における「信」の強調は、少なくとも強力な軍事力を持たないが故に平和外交に徹するしかないという、小國自立の模索を表象しており、その限りではそれともやはり金允植の思想への接近を示していると言へる。

甲申政変失敗を契機として、變法的開化派の朝鮮独立化構想に大きな転回が認められることはもはや明白であらう。ではそれはいかなる条件によつてもたらされたものなのか。それは何よりも朝鮮をめぐる國際条件によつて規定されてゐたものと思われ。

甲申政変以後、朝鮮は日清兩國の角逐場である他に英露の帝國主義的対立の角逐場ともなり、前後二度にわたる朝露密約事件やイギリスによる巨文島占領事件が起きた。前者は朝鮮への清國の重圧強化と日清の全面衝突への朝鮮の危機感を背景とし、後者はアフガニスタン問題をめぐる英露の対立を背景としていた。しかし英露の対立はそれ以上深化せず、むしろ鎮靜化した。それは何よりも英露がいまだ朝鮮に市場としての魅力を感じてゐなかつた——他の諸列強も同様であつた——ことによる。イギリスは清國が朝鮮の領土保全を確証する限り、両者の宗屬關係を認め朝鮮の現状維持を図つたし、他方ロシアは日清間の勢力が均衡を保っている限りにおいて、朝鮮への積極的進出を断念した。

そして朝鮮に対する清國の宗主権は李鴻章・袁世凱（駐劄朝鮮總理事交涉通商事宜）ラインによつて以前より明らかに強化された。しかし他方で、一八八五年四月の天津条約において日本が清國と同等の權利を獲得すること——兩軍の朝鮮撤退と相互間における有事の際の朝鮮出兵通知の義務化——によつて、日清間の軍事的均衡は少なくとも日清戦争まで保たれるに至る。言わば清國の強化された宗主権の下、諸列強が勢力均衡を保つ状態が現出したのである。

金玉均や朴泳孝は、こうした朝鮮における日清をも含む諸列強の勢力配置を的確に把握したものだと思われ。対清協調路線を前提と

する小国主義への転回は、きわめて現実的な選択であったと言える。

#### 四、俞吉濬の対清協調論

変法的開化派と目される人士の中でも、対清協調論を前提とする小国主義への転回をもっともドラスティックに遂げるとともに、理論的にも鮮明化したのは俞吉濬である。

彼はアメリカ留学中のため甲申政変に参加はしなかったが、彼の思想的立場は少なくとも甲申政変までは変法的開化派のそれと軌を一にしていた。甲申政変以前なによりもその人間関係において金玉均との関係がもっとも深かった点で、彼は本来金玉均とその志を同じくしていた。留学先のアメリカで甲申政変の消息を聞いた俞吉濬は、一年後の一八八五年二月にヨーロッパ經由で帰国するが、その途上日本に立ち寄って危険を覚悟の上で金玉均に会ったのは、金玉均との親密な関係を如実に物語っている。朝鮮政府が帰国した俞吉濬をただちに軟禁した（一八九二年まで）のも、彼の変法的開化派との濃密な関係を認めたからこそであった。

したがってこの時期に書かれた俞吉濬の著作には当然のように変法的開化派の思想の特徴が認められる。一八八三年に書かれた「競争論」という論文では、社会進化論の影響をすでに受けていた彼は、現実の弱肉強食の世界の中では国家の文明富強と独立の達成が競争の精神を持ち得るか否かにかかっていることを強調し、インドがイギリスの奴隷となった事態を競争精神の欠如に求めた。それゆえ彼は朝鮮人一般の競争精神の活発化を訴えるとともに、朝鮮をして

「一国の文明を進めて一国の富強を成し、国威をして万邦に震轟させ、国光をして四海に照耀させることを余等は希願する」とした。それは変法的開化派に特徴的な富国強兵化<sup>①</sup>と大同志向の発露であったと言える。

しかし俞吉濬は、甲申政変から一年足らずの間に自らの考えを急速に転換させる。それは言うまでもなく、前節で述べた朝鮮をとりまく諸情勢の変化に規定されたものであったのだが、欧米諸国を見聞して視野を広げたことも少なくない作用を及ぼしたものと考えられる。

彼の思想的転回は帰国後ただちに書き上げられた「中立論」（一八八五年末）という論文に認めることができるが、これは金玉均の朝鮮中立化構想に先立つこと半年ほど前に書かれたものである。俞吉濬の朝鮮中立化構想は朝鮮に対するロシアと日本、特にロシアの侵略を予想して構想されたもので、それは朝鮮の自強の不備を前提としている。すなわち彼は、

其在我邦、為亞洲中立之國乎、夫有國而不能自強、願借諸邦之約、僅々欲為自保之計。

として、自強論にとつてかわるに中立論を提示する。それは必ずしも自強論の放棄ではないものの――単にその困難さを指摘しているにすぎない――、甲申政変以前の、少なくとも大同志向的な富国強兵論の完全放棄を意味していたことは確かである。この時期の彼においては、朝鮮中立化だけが「寔我邦保守之策」と考えられており、しかもその実現は「今則可謂時機合」として、今こそもっとも可能な時節であると確信されていた。

ならば朝鮮中立化の具体策は何か。彼は、

乞中国之為盟主、会同諸國如英・法・日・俄之有關係於重土者、而進我於其間、共訂其盟歟乎、此非獨為我邦之地、亦中国之利也、諸國相保之計也。

と述べている。それはすなわち清国盟主下における列強会同による朝鮮中立化案であり、金玉均の対清協調による朝鮮中立化案ときわめて似通った構想である。

しかし同じく対清協調論を展開しながらも、兪吉濬の場合はより積極的である。金玉均の対清協調論は必ずしも朝貢体制の維持を前提とするものではなく、一元化された条約体制の中でも可能なものであったと判断されるが、兪吉濬にあつてはむしろ朝貢体制の維持こそが前提とされていた。そもそも彼は中国の伝統的な属国支配のあり方を、

中国待遠人之道、自古迄今、概從寬柔、只收其貢、冊其封、而使自為治、余不復問也。

と見ていた。すなわち彼は、朝貢と冊封を媒介としてのゆるやかな服属關係が伝統的な中華帝国体制のあり方であつて、なんら朝貢国の独立は妨げられないと認識していた。しかも「衣冠文物」と「俗尚好惡」が同じで、「親附之深」と「倚信之篤」で結ばれた朝鮮と中国の關係は特別に濃密なものである。それゆえ彼は「其終始方略、惟在中国、而我邦之所親信、又莫如中国」として、清国への依存を正当化したのである。

兪吉濬の朝鮮独立化構想は今や、金玉均以上に金允植や閔泳煥などが唱えた自強的事大政策を前提とする小国主義とほとんど変わら

ないものになった。中立化構想の有無という差異はあるものの、朝貢体制と条約体制の併存という二重体制の均衡の上に朝鮮の独立を

図って行こうとする点ではなんら変わらない。兪吉濬は朝鮮中立化のモデルをベルギーとブルガリアにとつたが、それは彼の二重体制論を考える上で示唆的である。彼によれば、朝鮮がアジアの要衝に位置しているという点ではヨーロッパにおけるベルギーと同じであり、朝鮮が中国の朝貢国であるという点ではブルガリアのトルコに対する關係と同じである。しかし朝鮮は世界各国と同等の立場で条約体制に参入しているが、ブルガリアはそうではなく、またベルギーは他の国の冊封を受けていないという点で朝鮮とは違う。それゆえに兪吉濬は、朝鮮の国際政治上の地位はベルギーとブルガリアの両者を兼ねるものだと考え、「我邦之體勢、實兼比（ベルギー——筆者注）・発（ブルガリア——筆者注）兩國之典例」とした。それは二重体制の均衡が朝鮮独立の重要条件であるということを彼が十分に意識していたことを示すに他ならない。

ところが従来、兪吉濬を対清独立論者と見なす有力な見解があつた。彼が一八八九年に稿了した「西遊見聞」（國漢文体、一八九五年出版）の第三編中の「邦国の權利」は、まさに対清独立の理論的構築を試みたものの如く見なされている。「邦国の權利」中に出て来る「兩載体制」という語に逸早く注目したのは原田瑣氏である。氏によれば、「兩載体制」とは対清独立を意図する兪吉濬が、「第三国に對しては、朝鮮、清とも主權國家としてそれぞれ当該國と國家主權の行使という点において對等に條約を結びながら、朝鮮と清の關係のみは、旧來宗屬關係にあつたということから、國際法（万国公

法)上は同等にもかかわらず、不平等な関係にある」ことを批判したものであると言う。しかし上述したような「中立論」における兪吉濬の、朝貢体制を前提とする対清協調論の文脈からすれば、そのような理解は疑問とせざるを得ない。

「邦国の権利」で兪吉濬が言わんとするところは、「贈貢国」||朝貢国とは強大国の脅威から自己を保全するために約章を遵守して「受貢国」||宗主国に朝貢する国家を意味し、それゆえそれは独立主権を喪失した「属国」とははっきりと区別され、「万国公法」上は宗主国とも同等であるのだということである。彼はこれ以上のことはなんら展開していない。朝貢体制からの離脱には全く言及がなく、むしろ朝貢国の宗主国への一方的廃貢については、「約章の違背は信義を損毀することにして公法の取らざるところなり」とさえ言う。朝貢体制の廃棄を兪吉濬が主張しなかったことは、原田氏も認めるところである。

そもそも「邦国の権利」の元原稿は一八八五年、すなわち「中立論」と同じ年に書かれた「国権論」(純漢文)である。「国権論」は対清協調論を展開した「中立論」と矛盾するものではなく、むしろ「万国公法」によって二重体制の理論的説明を試みたものと見なされる。そして「邦国の権利」は若干の加筆はしたもの、この「国権論」をほぼ全面的に国漢文に翻訳したものである。したがって「邦国の権利」はなんら対清協調論を批判するものではないのである。

ただ、「兩載体制」なる語が「邦国の権利」においてはじめて使われる兪吉濬の造語であり、多少の批判的意味あいを含んでいること

は事実であろう。当時強化された清国の宗主権行使が朝貢体制の枠組を越えることを警戒する謂が、その語にあることは否定できない。しかし、それは警戒以上のものではけつてなく、ましてや対清協調論の放棄などでは全くない。一説には軟禁中彼は閔氏政權に協力し、また袁世凱にも受け入れられるようになったと言う。兪吉濬の朝鮮独立化構想はあくまでも二重体制の均衡を前提とするものであり、「兩載体制」とは二重体制の均衡が破れる状態を意味したにすぎない。

だが二重体制の均衡は、皮肉にも兪吉濬が『西遊見聞』執筆段階に警戒したのとは全く逆の形で崩れることとなる。すなわち一八九四―一八九五年の日清戦争の勃発と日本の勝利は、その均衡を朝貢体制の廃棄↓条約体制への一元化という形で崩壊せしめた。甲午改革における兪吉濬の親日派としての登場は、そうした予期せざる体制転換への窮余の対応であった。このことは金允植についてもそのまま妥当する。

ところで最後に、兪吉濬の「万国公法」観について若干検討しておきたい。二重体制を合理化するために「万国公法」を縦横に駆使していることから分かるように、彼において「万国公法」が肯定的に認識されていたことは言うまでもない。彼の場合「万国公法」への関心は甲申政変以前からあったが、その段階では「一国の国権の基本は兵力に在ると言うは可なり」と述べているが如く、国家独立の基礎をなお軍事力に求めていた。しかし自強の困難さを自覚した甲申政変以後、彼の関心の比重は「万国公法」に置かれることとなる。「比隣の景況は友睦する信義を結ぶことだと考える彼は、「万

国公法は邦国の発達する事体を掌守し、かつ弱国の権利を衛護して主権を一致に帰するものなり」と断言さえするに至る。

こうした「万国公法」観は金允植のそれとて似通っている。兪吉濬もまた「万国公法」の万能を信じているわけではなく、もとより彼は「強者之欲並弱、大者之欲吞小、固人世之技藝」として弱肉強食の現実を直視していた。それゆえ彼にとっては、「万国公法」はけっして万能ではないが、帝國主義時代を生きぬく上での一つの有力な武器として認識されていたものと考えられる。

ただ、兪吉濬の文明観は必ずしも金允植と同じではなかったことを指摘しなければならない。兪吉濬においては「行実の開化」（五倫）＝儒教倫理は普遍ではあったが、文明が「至善極美の境域」に至るのは「未開化」→「半開化」→「開化」という階梯をたどるものとされた。それは反儒教ではけっしてないが、基本的には西欧文明に帰一する文明観であり、「東土文明之地」をもとより自負する金允植の文明観とは異なっていたのである。したがって兪吉濬の欧米批判の論理は、「有道之國」の実現を説く金允植ほどには明確なものになっていなかったと言える。

## 五、おわりに

従来朝鮮開化派のナショナリズムは、金玉均ら変法的開化派のそれをもって正統視するのが一般的であった。それは西欧文明のトータルな受容と伝統的な朝貢体制の廃棄を前提とする国民国家創設の試みであり、日本の近代＝脱亜を理想化するものであった。

これに対し「東道西器」論と伝統的な朝貢体制の維持を前提とす

る金允植ら改良の開化派のナショナリズムは、冒頭でもふれたように国民国家創設の自覚が全くないか、あるいは不十分であったとされて来た。しかし改良の開化派のナショナリズムは、西欧近代と日本近代、更にはそれに追隨した金玉均のナショナリズムを相対化する視点を与えてくれる。西勢東漸の危機的状況の中で、朝貢体制からの離脱を前提とする国民国家創設の道だけが朝鮮近代の唯一の選択だったのではけっしてない。伝統的な東アジア秩序の護持を前提に小国主義を貫徹することによって西勢東漸に対抗しようとする道もまた、一定の現実性を帯びていた。

帝國主義時代においては、「小国中立」の可能性はヨーロッパではほとんど奪われてしまい、結果として朝鮮においてもその試みが挫折するのはまぎれもない事実である。しかし東アジアでは少なくとも、日清戦争までは日中の運命は未定であった。したがって、対清協調による朝鮮小国主義が模索される現実的根拠は、いまだ失なわれていなかったと言わなければならない。変法的開化派の朝鮮独立化構想が甲申政変以後、改良の開化派のそれに近似してくるのはその一つの証左になろう。

そもそも金玉均のナショナリズムは朝鮮思想史上、反儒教＝伝統思想の拒否という点もさることながら、その大國志向の性格において特異な様相を見せているように思われる。朝鮮の伝統的華夷意識は文化意識を中心とするものであって、国家意識が前面に表われるものではない。実学思想の中には大朝鮮主義の思潮が確かにあったが、その場合でさえ文化意識が優先されていた。国家意識が前面に押し出される華夷意識は例外的なものにすぎなかった。その点で文

化意識より国家意識が優先される「日本型華夷意識」<sup>8)</sup>との違いは顯著であるように思える。朝鮮においては、国家意識の面ではもとより小国を自認するのが伝統的であり、その意味で金允植における小国主義的ナショナリズムこそいかに朝鮮的だと言わなければならぬ。

しかし今日では、朝鮮半島の南北を問わず、ほとんど金玉均的ナショナリズムしか存在していないように見える。金允植の思想的営為は今日なら顧みるに値しないものであるうか。筆者には彼の思想的営為は、近現代国家の相対化を考える際の一つの糸口を与えてくれるものと思えてならない。

# 注

- (1) 姜万吉(高崎宗司訳)『韓国現代史』(高麗書林、一九八五年)一三頁。
- (2) 姜万吉「東道西器論の再吟味」(同『韓国民族運動史論』ヘンギル社、一九八五年)ソウル、所収)参照。
- (3) 拙稿「朝鮮における大国主義と小国主義の相克——初期開化派の思想——」(『朝鮮史研究会論文集』第二二集、一九八五年)参照。
- (4) 本稿は、佐藤慎一「『文明』と『万国公法』——近代中国における国際法受容の一側面——」(祖川武夫編『国際政治思想と対外意識』(創文社、一九七七年)所収)の方法から教えられるところが多い。
- (5) 溝口雄三「近代中国像は歪んでいないか——洋務と民権お

よび中体西用と儒教——」(『歴史と社会』二、一九八三年)、同「ふたたび「近代中国像」をめぐる」(『史潮』新一九号、一九八六年)参照。

(6) 濱下武志「朝貢貿易システムと近代アジア」(『国際政治』第八二号、一九八六年)、同「近代中国における『アジア』と『ヨーロッパ』」(『東洋文化』六七、一九八七年)参照。

(7) 李光麟「韓国における『万国公法』の受容とその影響」(同『韓国開化史の諸問題』(二)潮閣、一九八六年、ソウル)所収)参照。他に朝鮮開化期の「万国公法」観を扱ったものに、李漢基「韓国及び日本の開国と国際法」(『学術院論文集』(人文・社会科学編)一九、一九八〇年、ソウル)や金鳳珍「『漢城周報』の発行と朝鮮の万国公法受容」(韓国社会史研究会『韓国伝統社会の構造と変動』(文学と知性社、一九八六年、ソウル)所収)などがある。

(8) 金綺秀「日東記游」(『修信使記録』(韓国史料叢書第九)所収)七〇頁。

(9) 金弘集「大清欽使筆談」(前掲『修信使記録』所収)一七七頁。

(10) 金弘集は帰国に際し、「親中国・結日本・聯美国」を唱える駐日清国公使館参贊黄遵憲の著わした『朝鮮策略』を持ち帰った。これを契機に衛正斥邪上疏が巻き起こるが、その中で『万国公法』は金弘集の危惧した通り「邪書」として指弾された(前掲李光麟論文、一六〇頁)。

(11) 原田環「朝鮮の近代化構想——俞吉潐と朴泳孝の独立思想

- 『史学研究』〈広島大学〉第一四三号、一九七九年）一  
——一二頁。
- (12) この交渉過程については、宋炳基「金允植・李鴻章の保定・天津会谈——朝美条約締結（一八八二）のための朝清交渉」、『東方学志』〈延世大学校国学研究院〉第四四—四五輯、一九八四年、ソウル）が詳しい。
- (13) 「天津奉使縁起」、『金允植全集』二（亜細亜文化社、一九八〇年、ソウル）所収）五二—五三頁。
- (14) 同右、五一—五三頁。
- (15) 「陰晴史」〔従政年表・陰晴史〕〈韓国史料叢書第六〉所収）七九頁。
- (15) 「与英国領事賈禮士書」〔前掲『金允植全集』二、所収）三一—四頁—三一—五頁。
- (17) 前掲『陰晴史』八〇頁。
- (18) 同右、九五頁。
- (19) 「十六私議」〔前掲『金允植全集』一、所収）四八—四九頁。孔子の教えとは、『論語』「顔淵第十二」にある「子貢問政、子曰、足食、足兵、民信之矣。子貢曰必不得已而去、於斯三者何先、曰、去兵、子貢曰、必不得已而去、於斯二者何先、曰、去食、自古有死、民無信不立」を指す。
- (20) 同右、五〇—五二頁。
- (21) 『統陰晴史』〈韓国史料叢書第二二〉上、一五六—一五七頁。
- (22) 前掲拙稿、参照。
- (23) 前掲『陰晴史』五二—五三頁。
- (24) 同右、五七—五八頁。
- (25) 「千一策」〔閔忠正公遺稿〕〈韓国史料叢書第七〉所収）四七頁。
- (26) 同右、六六頁。
- (27) 同右、四七頁。
- (28) しかし閔泳煥と金允植は日本認識において異なる。両者とも西欧化した日本の侵略性を非難、あるいは蔑視しながらも、前者は単に日本を敵視するのに対し、後者は複雑である。金允植は「日人・中国一戦決雌雄、一則上國、一則友邦、我國当何以処之」〔前掲『陰晴史』八二頁〕と述べている。彼においては条約体制の堅持も不可欠なことなのであって、日本は蔑視の対象でありながらあくまでも「友邦」である。二重体制の崩壊こそが彼のもっとも恐れる事態であった。
- (29) 前掲拙稿、参照。
- (30) 秋月望「朝中間の三貿易章程の締結経緯」〔『朝鮮学報』第一一五輯、一九八五年〕参照。
- (31) 「隨聞録」〔魚允中全集〕〈亜細亜文化社、一九七九年、ソウル〉所収）五三頁。
- (32) 前掲拙稿で、前掲『魚允中全集』所収の「東萊御史書啓」を使って彼の明治維新批判を展開したが、その後、ソウル大学校奎章閣文庫を調査した許東賢氏によって、それは魚允中の著書ではないことが明らかになった（「一八八一年朝鮮朝士日本視察団に関する一研究——『聞見事件類』と『隨聞録』を中心に——」〔『韓国史研究』五二、一九八六年、ソウ

- ル(参照)。しかしにもかかわらず、魚允中の明治維新評価は許東賢氏の言うようにそれほど肯定的ではない。何よりも日本の大國志向に対するに、小國モデルを提示したことはその有力な証左になろう。許東賢氏は魚允中を「変法自強論者」として位置づけるが、そもそもそうした評価に問題がある。後述するように、改良的開化論者と変法的開化論者の違いはその文明観に起因するものと思われるが、典型的な変法的開化論者の尹致昊が文明(近代)主義の立場から朝鮮野蠻論を展開すると、魚允中はそれを「何其言之愚也」として一笑に付したという(『尹致昊日記』(韓國史料叢書第一九)一、四一頁)。「我國免野蠻久矣」(同上)と見る魚允中にとって、朝鮮はまさに伝統的な文明の地なのであって、単なる朝鮮の西欧文明化は彼の意図するところではなかったと言える。
- (32) 茂木敏夫「李鴻章の屬國支配観——一八八〇年前後の琉球・朝鮮をめぐる——」(本誌第二号、一九八七年)参照。
- (34) 「時務説送陸生鍾倫遊天津」(前掲『金允植全集』二、所収)二〇頁。
- (35) 王芸生(長野勲・波多野乾一編訳)『日支外交六十年史』第一卷(建設社、一九三三年)一三八頁。なお原典は「日本使臣森有礼署使鄭永齊來直隸總督署内晤談節略」(『清季中日韓關係史料』第二卷、所収、二八三頁)である。
- (36) 徐載弼「回顧甲申政変」(閔泰媛『甲申政変と金玉均』(國際文化協會、一九四七年、ソウル)所収)八二頁。
- (37) 「朝鮮改革意見書」(『金玉均全集』(亜細亞文化社、一九七九年、ソウル)所収)一一七頁。
- (38) 前掲「回顧甲申政変」八四—八五頁。
- (39) 前掲『統陰晴史』上、一五六頁。
- (40) 青木功一「朝鮮開化思想と福沢諭吉の著作——朴泳孝『上疏』における福沢著作の影響——」(『朝鮮學報』第五二輯、一九六九年)、同「朴泳孝の民本主義・新民論・民族革命論——「興復上疏」に於ける変法開化論の性格——」(『朝鮮學報』第八〇輯—一九七六年、第八二輯—一九七七年)参照。
- (41) 「朴泳孝建白書」(『日本外交文書』第二二卷、所収)二九五頁。
- (42) 同右、二九六頁。
- (43) 同右、二九六—二九七頁。
- (44) 上疏と書簡は、『朝野新聞』に遅れて『東京日日新聞』も七月九日と一五日にそれぞれ掲載した。
- (45) ただし、富國強兵論と対清協調論は必ずしも矛盾するものではない。
- (46) 近藤吉雄「井上角五郎先生伝」(一九四三年)一一七頁。
- (47) 宮崎滔天の回想によれば金玉均は、「亜細亞の問題は、支那の興亡によりて定まる。朝鮮畢竟何するものぢや、アレは只の蹈台ぢや。僕は少なくとも朝鮮と云ふ小問題は閑却して居る」とまで語ったという(葛生東介『金玉均』(一九二六年)一〇三頁)が、誇張された表現ながら、金玉均の清國への思い入れを示すエピソードではある。
- (48) 自強と富國強兵は必ずしも同じ概念ではない。金弘集と高



- 宗との間で、「上曰、自強、是富強謂乎。対曰、非但富強、將自強修我政教、保我民国、外畔無從、此実自強之第一先務」(『修信使日記』(前掲『修信使記録』所収)一五八頁)という会話が交わされているが、要するに自強とは王道的イメーヂであり、富國強兵の霸道的イメーヂとは異なる。
- (49) 前掲『朴泳孝建白書』三〇九頁。
- (50) 同右。
- (51) 富國強兵の徹底化をイギリスの巨文島退去の条件とし、やはり否定的「万国公法」観を持っていたと思われる金玉均も、他方では「外ハ広ク欧米各国ト信義ヲ以テ親交」すべきことを上疏中で述べていた。
- (52) 藤村道生『日清戦争』(岩波書店、一九七三年)四〇―四三頁。
- (53) 俞東潯『俞吉潯伝』(一潮閣、一九八七年、ソウル)二七―三三頁。
- (54) 「競争論」(『俞吉潯全書』Ⅳ(一潮閣、一九七一年、ソウル)所収)五七―五八頁。
- (55) 同右、五九―六〇頁。
- (56) 「中立論」(前掲『俞吉潯全書』Ⅳ、所収)三三六頁。
- (57) 同右。
- (58) 同右、三二七頁。
- (59) 同右。
- (60) 同右、三二三頁。
- (61) 同右。
- (62) 同右、三二八頁。
- (63) 姜万吉「俞吉潯の韓半島中立化論」(同『宮嶋博史訳』『分断時代の歴史認識』(学生社、一九八四年)所収)は俞吉潯の「中立論」を中立に力点を置きすぎて読んでおり、対清協調の意義が見失なわれているように思われる。
- (64) 前掲「中立論」三二〇―三二二頁。
- (65) 同右、三二二頁。
- (66) 前掲原田環論文、二〇頁。
- (67) 俞吉潯『西遊見聞』(復刻本)(景仁文化社、一九七二年、ソウル)九四頁。
- (68) 一八八五年説は李光麟氏の所説による(「俞吉潯の開化思想」『西遊見聞』を中心に)「同『韓国開化思想研究』一潮閣、一九七九年、ソウル、所収」七五頁。
- (69) O. N. Denny, *China and Korea, 1888, Seoul* (日本語訳『清韓論』一八九〇年)は外国人の立場から同様の警戒を發したものであるが、俞吉潯とは違ひ対清国批判は明瞭である。柳永益「甲午更張以前の俞吉潯——一八九四年親日改革派としての登場背景を中心に——」(『翰林大学論文集』(人文・社会科学編)第四輯、一九八六年、春川)参照。
- (70) 「世界大勢論」(前掲『俞吉潯全書』Ⅲ、所収)九三頁。
- (71) 前掲『西遊見聞』八八頁。
- (72) 同右、九二―九三頁。
- (73) 同右、九二―九三頁。
- (74) 前掲「中立論」三二二頁。
- (75) 前掲『西遊見聞』三七五―三七六頁。

(76) 俞吉潯が儒教を必ずしも否定しなかった点で、彼の思想を儒教否定であるにとらえる原田環氏の見解（『十九世紀の朝鮮における対外的危機意識』〈朝鮮史研究會論文集〉第二一集、一九八四年）一〇三頁）には従えない。また彼の思想を「東教西法」とする姜在彦氏の見解（『朝鮮の開化思想』〈岩波書店、一九八〇年〉一七五頁）は妥当のようだが、金允植の思想に近づけすぎた理解のように思われる。

(77) 百瀬宏『小国』（岩波書店、一九八八年）参照。

(78) 遠山茂樹『東アジアの歴史像の再検討——近現代史の立場から——』（幼方直吉・遠山茂樹・田中正俊編『歴史像再構成の課題』〈御茶の水書房、一九六六年〉所収）参照。

(79) 曹泳禄「一七〇八世紀専制的華夷観の一視角」（『東国史学』第一七輯、一九八二年、ソウル）参照。

(80) 荒野泰典『近世日本と東アジア』（東京大学出版会、一九八八年）参照。ただし荒野氏自身指摘していることだが、本来の華夷意識が文化意識を中心とする概念である以上、国家意識を中心とする「日本型」なるものをそう呼ぶことは必ずしも適切ではない。「日本型華夷意識」とはあくまでも便宜的言い方にすぎない。

(81) 今日歴史的産物としての国民国家なるものは、いまだその価値を喪失しておらず、神話化されるには至っていない。しかしながらその相対化の動きは、徐々にではあれ進行しているように見える（福田歓一『国家・民族・権力——現代における自由を求めて——』〈岩波書店、一九八八年〉参照）。こ

うした世界史的視点に立つて、冒頭でふれた姜万吉氏の問題提起に対する筆者の反論をいまま少し展開すれば、次のようになる。やがて来たるべき朝鮮の統一が、「連邦国家」という形態をもつて実現するとするならば、それは本来なら相容れることのない資本主義と社会主義という二重体制の均衡の上に定立されるはずである。したがってそれは、統一された朝鮮民族の国家でありながらも、もはや従来の国民国家の範疇では把握し得ない国家なのではないか。今や朝鮮は、国民国家の創設ではなく、むしろ逆にその相対化を前提としての新たな国家創出という、希有な歴史的課題を背負っていると言ふべきように思われる。